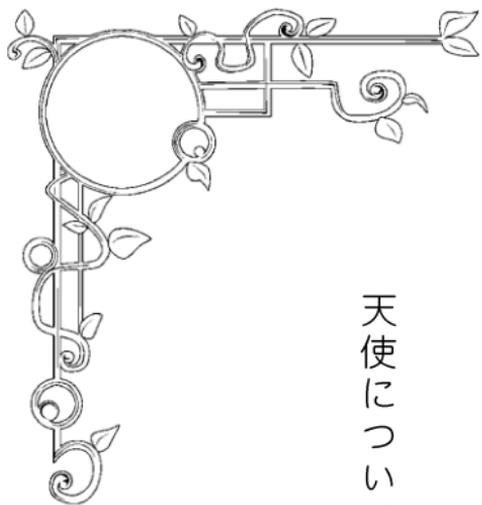


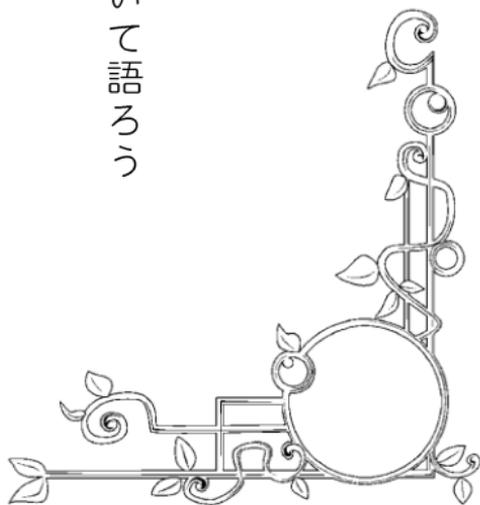
# 天使について 語ろう





天使について語ろう

夏井青葉



どんよりとした空だ。暦の上では春なのに、まだ肌寒い日が多い。また湿った空気が海から流れ込み、山脈にぶつかって雨を降らせるのだろうか。気が滅入る。ぼんやりと歩いていたら、兵舎の陰に人が蹲っているのが目に入り、ぎよっとして駆け寄った。

「どうした！ どこでやられた？」

「…いや、違うんです。」

彼は辛そうに顔を上げた。左肩を押さえていて、左腕が不自然にだらんと垂れている。胸がサツと冷える。脱臼してるんだ。

「大変だ、とにかく手当てをしないと。医務室に行くといい。」

「…すみません、それはどこですか？」

新入りか。そう言えば見ない顔だ。

「いいよ、おいで。」

出来ることなら行きたくないけれど…。ため息を吐いて、彼に肩を貸した。よろめきながらもなんとか歩ける様子にほっとする。

「すみません…本当にすみません。あの、あなた、お名前は？」

「トーマス・オルブライト。」

彼は俺の階級章を見て、ぎこちなく言った。

「…オルブライト大尉は…。」

「トミーでいいよ。」

「ありがとうございます。お、俺、カレル・ポランスキです。カレルって呼んで下さい。」

カレルは笑ったが、すぐに顔をしかめて肩を押さえた。こいつ、どこのどいつだろう。だけど具合が悪そうな今、いちいち素性を聞くのも可哀想だ。何があつたんだろう。軍服から僅かに覗く首筋にも赤い傷がついている。それにしても今は冴えない顔をしているが、こいつ普通にしていれば結構いい男なんじゃないか？ 背も高いし…。ちえ、ムカつくな。あまり考えないようにしているが、俺は正直背が高い方じゃない。

医務室は病棟の入り口にある。狭い部屋に、ベッドが二つ。普段は診察室と医師の寝室を兼ねるが、たまに目の離せない患者がここに泊まる。俺も泊まつ

た。そして……。思い出さないようにしていたのに。入ってみると、医務室は空だった。

「君はそこに居て。大丈夫、代わりに誰か呼んで来るから。」

俺だって暇じゃない。それに、出来れば彼と顔を合わせたくない。早足でドアに向かったら、触れる前にそれは唐突に開いた。コリン・マックスウエル、不意打ちだ。彼は素早く、俺を上から下まで眺めた。

「あつ：軍医、その……。今まで、どこに？」

動揺して、どうでもいい質問が口をついた。

「葬式。」

短い返答にはっとする。

「別に、珍しくもないだろ。」

彼は俺の肩越しにベッドを見て、「ああ。」と言うとスタスタそちらに向かった。

「君が患者だね。話して、どうしたの？」

カレルは何か言おうとしたが、口ごもり、俺の方をちらりと見た。コリンも

僕を振り返る。

「…トミー、出てって。」

「えっ。」

「もういいから。二人にして。」

「あ…あの…俺の名前を？」

「一度診た患者は忘れないよ。」

言って、手をひらひら振って促す。ドアを閉めて、ため息をついた。…忘れていないんだ。動悸が収まらない。じゃあ、あのことも…？

部隊にスケジュールの変更を指示してから作戦室を訪れたが、まだパラパラとしか人は居なかった。一際目を惹く彼に近づく。ローリー・コバーンは俯いて、小さく何か歌っていた。ご機嫌だな。だったら切り出し易い。少し迷ったが、まあいいや、面倒臭い。ずばりと言った。

「ローリー、俺達…最近寝てないよな？」

ローリーは俺を見て、唇を舐めた。